――――何かがクライマックスを迎えようとしている。

そんな気配が、私・渋谷凛にも空気となって伝わっていた。
誰かが何をしているのかも分からない。卯月や未央がどこにいるのかも知らない。けれども、この予感だけは本物。

（まぁ、そろそろこのバカ騒ぎも終わり…だと良いんだけど）

そう内心ぼやきながらインタビュールームを抜けると、本来はつながってないはずの場所、第三芸能課の部屋へと続く。異空間に飲まれてねじれたこのプロダクションの順路をちゃんと全部覚えてる人はいないと思うんだけど、スマホにメモしてなんとか移動できている。

「あらごきげんよう。どうされましたの？」
「ごめん、ちょっと通らせてもらうね」
「ええどうぞ」

全裸でペニスを晒したまま紅茶を楽しんでいる桃華の横を通り抜けた先は収録スタジオ脇の廊下。そうして最初の扉をこえると目的の場所。

「オハヨ。久しぶりだね」
「…涼。そうだね、久しぶり」

吹き抜ける風が気持ちいいこの場所、屋上のスペースに彼女・松永涼は立っていた。

「飲むでしょ？」
「うん、ありがとう」

缶コーヒーを受け取って開くと、ビターな香りが鼻をくすぐる。それがなぜか涼そのもの、彼女の軽く日焼けした肌の色を思い起こさせた。

「ふぅ…」
「いいカンジかい？」
「まあ悪くないかな」

言いながら私は涼が見つめてる方向に目をやる。
「――――そろそろ決着かな」
「だな…んまァこうなるよ、注意はしたんだけどな」

私たちが見つめる先ではひとつのセックスの勝敗がつこうとしていた。

「ほらほら、ご自慢のスタミナはそんなものなの？」
「クソっ、こんな…ことが…！？」

脂汗を流しながら必死に腰を振っているのは木村夏樹で、そして松葉崩しの姿勢でそれを受けながら頬を紅潮させつつも余裕がありそうなのが北条加蓮。
ふたりの股間にも桃華と同じく隆々としたペニスが輝いている。

――――そう、それが私たちが成ってしまったもの、ふたなりサキュバス。
なんでこんなものになってしまったのかは分からないけれど、私たちはこの股間に生えてしまったものと、謎のルールによって、だれが上位者かをセックスで決め、支配をしあうゲームに巻き込まれてしまっている。
そして隣に立つ涼とか、今眼下で悶え狂っている夏樹とかは、その欲求に従うことを良しとしてしまったアイドルたちだ。

「あはっ、自慢の無尽蔵のスタミナってこんなものなのぉ？大したことないよぉ？これじゃあいつもトレーニングに付き合ってくれる奈緒のほうが数倍すごいかも」
「こっちのフルスロットルが…クソっ、どうなってるんだ！？ぐぅ、引きずり込まれる…んくぅぅぅぅ！」
「…ッ、そうやってぇ…必死に腰を動かすとどんどん冷静さが損なわれてさぁ…ふふっ、雑なグラインドになってるよ。それじゃあ感じられないな」
「こなくそっ…うぁ、ぁぁぁぁ、なんで、攻めてるはずなのにぃ…ぅぅぅぅ…！？」

加蓮が夏樹にスタミナで勝てる。なんてことは当然ありえない。
だいぶマシになったとはいえ元々病院で療養生活を繰り返していた加蓮だ。もちろん夏樹だってその弱点を突く気だったに違いない。

「攻めさせることでわざと難しい体位を強制する。…自分のスタミナを過信するなって伝えたんだけどな」

「や、ぁ、らめぇ…これじゃあ…ぁぁぁぁアアア、もうっ、んひぁぁぁぁぁ！？」
「そろそろかな…早くなってるのは射精の間隔だけじゃない」
「ま、またザーメンでる、でる、でるでるでる出るぅぅぅぅぅぅ！？」
「…っはぁ…！うふふっ」

苦笑する涼の前でもはや勢いのなくなった射精が弾け、夏樹はグロッキーな様子。

「はぁ…ふぅ…な、なんで…こんな…ぐぅ…」

「だってぇ、私たちはふたなりサキュバスなんだよ？サキュバスの武器はおちんちんじゃなくて、お・ま・ん・こ…じゃない？」

「うぅぅぅ…ぐ、ぅ…」

そうやって蠱惑的な笑みを浮かべる加蓮は、他の誰よりもサキュバスらしい。なんというかこの状態を楽しんでしまって本当にふたなりサキュバスとしての愉悦に浸ってしまっているんじゃないだろうかと不安になるけれど、あまりそこを突き詰めて藪蛇したくない。

「ふふっ、もっと、射精できるよね？スタミナ自慢だもんね？『ビートとタフネスでよがり狂わせてやる』んだったよね？」

「ハッ、ハッ、ハッ…うぅ、ちょっと…もう…アタシ…は……」

「だぁめ。許してあげない」

ぐいっと両脚で夏樹の腰を抑えつけて逃がさないようにして、器用にその動きを先導していく。良く見えないけど、その動きで夏樹のペニスはすぐに硬さを取り戻してしまってるんだろう。

「うぁぁぁ！？また吸われる、くぁぁぁぁ！？」
「んふふっ…油断なんてしてあーげない。しっかり食べてあげるね、夏樹」
「やめ、これ以上…んぁひぃぃぃぃぃぃぃっっっ！！！」

「…あーあ。……ま、仕方ないか。夏樹の逆転の目はなさそうだ」
「結構ドライなんだね」
「お互い合意の上でサシでやりあった結果に部外者が口出しするのってめっちゃ格好悪いだろ？」
「それはそうだね」
「――――――あぁ…」

缶コーヒーを飲み干して、もはや一方的な凌辱と化したふたりのセックスからは目を外す。ふと見上げた夜空は綺麗で、思わず小さく声が漏れた。

「ん？ああ、キレイだよな。星空なんてしばらくまともに眺めてなかったわ」
「うん。…そういえばシリウスって冬しか見えないんだっけ」
「らしいな。プロデューサーサンが言うには冬の初頭って話だったぜ」
「…じゃあ今の季節は見えないか」

私と涼、そして千夜で組んだユニットの名前に由来する星のことを思い出して星々を見つめる。そこにシリウスは輝いていないらしいけど、どこかで輝いているはずの美しい光。
自分の生き方を否定なんてさせない…舞台の輝きを忘れられるはずがない…誰かに敷かれたレールなんて知るものか…『……ンなの、クソくらえだ』と吐き捨てた涼の孤高を恐れない強さに私は憧れたんだ。
だから…

「――――ねえ」
「なんだ？」
「今、涼が見ている夢は私と同じじゃないのかな」
「……ああ、そうだろうな」
「そっか。でもそれって前言ってたロックな生き方とは違うんじゃない？こんなどこかの誰かが仕組んだショーのステージに上げられて、そこでメロディーにあわせて踊るの？」

うーん…と言葉を漏らして涼が髪をかき上げる。ブロンズに染め上げられた長髪は、同性の私から見ても魅力的だ。お嬢様だったという育ちの良さからくる所作のひとつひとつは、彼女のファッションやステージ上でのロッカーとしての姿とコントラストを形成している。
それはまるで私が実家の手伝いで花束を作るときに補色(色相環で正反対に位置する関係の色の組合せのこ

と）を意識してオレンジ色の花には青とか紫の花を組み合わせる。そういう所に近いと思う。
私の思いとは関係なく涼の琥珀色の瞳は私を捉え、わずかに緩められた。
「走ってみたくなったのさ。たとえ夢見た場所と違っても、この道はどこかにたどり着けるはず」
「快楽に溺れて人間ではない何かに成り果てることだとしても？」
「終わらないスリルな夜。もっとイけるはず、もっと肉体同士が響きあえるはず、もっとぶつかり合えるはず
…これもロックだと思うぜ、アタシはな」
「…私は『こんなどっかの誰かが引き起こした事件で敷かれたレールなんてクソだ』って言うと思ってたんだけど」
「――――――夢見るシンデレラじゃいられなくなったのさ」
「……そう」
だったらもう、私のすることは決まっている。
私は服のボタンを緩めると、パッと脱ぎ捨てて下着姿になった。
その様子に戸惑った風もなく涼も同じように下着姿になって私と相対する。
「じゃあセックスで決めよう。私の道についてくるのか」
「…それとも、アタシの道についてくるのか。ははっ、アタシたちはそれぐらい単純な方が良い」

…分かっている。
涼は私よりもふたなりサキュバスとしての実力が上だ。格上の千秋とも何度も交わった私が互いの実力差について読み違えることはない。でもセックスをしないと分からないことがある。
あの誇り高くて、傲慢なくらいの涼がどうして肉欲に狂って良いとまで言いきれてしまうのか。それを知るためにも。

「そこの設備管理室の扉、抜けるとアタシたちの根城なんだ。そこでヤろうぜ」
「うん。そうしよう」

私はそうして涼に手を引かれて扉の奥に進んでいった。

「――どうした？見てるだけか？」

たどり着いた会議室の長机に、シーツとタオルケットを敷き詰めて作られた簡易ベッド。安定性に少し不安があるその上に乗って全裸で足を組む涼。

改めて眺めると、そのすらりとした肉体と豊満なバストの対比に目を奪われる。私より年上の肉体はどこか質感のある印象で、今から身体を重ねたらどうなってしまうんだろうと楽しみにすらなってしまう。

「しかしまあ、凛もいいカラダしてるぜ」
「そう…かな？」
「均整も取れてるし、その太ももさ…触ったら気持ちよさそうだなって思う」
「ちょっとそれ、おじっさんぽいよ」
「ハハハッ、たしかに」

脱いだ下着をたたんで近くの椅子に置くと、私は長机で作られたベッドの上にのぼる。ギシギシという音がして結構怖いんだけど、涼が気にしないので私も気にしないことにした。
生まれたままの姿で見つめあう私・渋谷凛と彼女・松永涼。
電灯もついていない薄暗い会議室の中で、彼女の姿は妙にはっきりと映って見える。

「キレイだな、凛」
「涼だってそうだよ」
「そっか。じゃあ…来いよ、まずはそっちのテクを見てやるからさ」
「フッ、一発で骨抜きになっても知らないよ」

涼と私、ふたりのふたなりサキュバスが見つめあう。
私が涼の股間に顔を近づけるとその意を察した涼はM字に足を開いて私を迎えてくれる。そこにはでろんと弛んだ姿をさらすペニスと、涼の秘められた場所が広がっている。そこから漂ってくる淫らな気配に私は思わず唾をのんだ。
―いけない。
そんなことじゃペースを握られてしまう。格上の相手にセックスでペースを握られたらどうしようもない。私は優しく涼のペニスに指を添えて、それをしごき始めた。

「んっ……、いいぜ、その調子だ……」

涼のペニスは私の手の中でどんどん大きくなっていく。そしてそれは私の股間でいきり立つモノと同じ形になっていく。

―やっぱり大きい……。

「どうした？もう終わりか？」
「……まさか」

私は自分のモノと涼のペニスを重ね合わせて、それをしごく。

「んっ……、やるじゃないか」

「そっちもね」

涼のペニスが私のモノに絡みつくようにこすれる。互いの敏感な部分がこすれ合い、私たちに快感を与えあう。

涼も私のモノに自分のペニスをこすりつけてしごいているから、完全にイーブンの状態だ。

「んっ……、くぅっ……やばっ…これはッ…」

「あっ……んぁっ……ふぅ・・・」

そして私たちは互いに限界を迎えた。

「んんんん、出るぅぅぅぅぅぅっ！？」

「あ、もう、我慢が…う、んぁぁぁぁぁっ！」

私と涼のペニスから白い液体が吹き出す。その勢いはすさまじく、私たちの身体だけでなく顔や髪にもかかってしまう。

「……ふぅ。いいね、いきなり仕掛けてくるとか、嫌いじゃないぜ」

「そう？じゃあ次はお掃除でもしてあげるよ」

涼しい顔で返す涼のペニスに顔を寄せると、まだ射精の余韻に浸って脈動するそれを、私は口に含んだ。

「うぅっ……、くぅっ」

涼のうめき声を聞きながら、私は口で奉仕する。舌で舐めまわし、口をすぼめて吸い上げる。

「うぁっ……凛ッ……」

涼が私の頭をつかんでくるけど気にしない。私はそのまま涼を絶頂へと導くために舌と唇を動かす。

「イイぜ…！そこ…気持ち…いい…！」

「んぶっ、ぢゅぅぅぅ、れろ、れろ…あむ…んん…」

私のクチの動きに反応して、私を掴む涼の指が震える。それは快感の確かな証明。

「あぁっ……、うぅっ……うぁっ……！」

そして私は涼のペニスを吸い上げ、舐め上げ、舌でくすぐってやる。そうすれば涼のモノはいよいよ限界を迎え…

「出るッ……！」

「んんっ！？」

どくどくんっ！どびゅっ！どぴぴゅ！！

そんな音を立てて凄い勢いで精液が私の口の中に発射される。それは私の喉奥を叩きながら胃へと流れ落ちていく。あまりの勢いに思わずむせそうになるけどなんとかこらえる。

「……んっ、二発目も濃厚だね。さすが」

「だろ？じゃあ次はアタシがそっちのお掃除をしてやるよ」

次は涼の番ってことなんだろう。
私は涼がそうしたように太ももを大きく開くと、自分のペニスとアソコを彼女に見せつけた。私が体重をベッドに預けるとまたギシギシときしむ音がする。そういえばここが机の上だったと思い出したけど、もう違和感は薄れていた。
「ほぉ…中々、これはイイ感じだ。ここの手触りも、悪くない」
そういって涼の右手が私の太ももを撫ぜる。少しくすぐったくて身をよじり、非難するような眼を向けると、涼はニカっと笑った。
「いやな、終わったら膝枕してもらうのも悪くないなってな」
「…もう勝った後のこと考えてるの？」
「楽しみは多い方がいいだろ？」
言いながら彼女は私の前に自慢のバストを突き出して来る。90もあるその豊満な双つの大輪が目の前で揺れると、それだけで強烈なインパクトがある。
「さて…これで挟んだらどうなっちゃうのかな…っと」

つぶやきながら私のペニスをサンドするように、そのふたつのおっぱいが迫る。射精後しばらくしてまた硬さを失ったそれが、乳圧に触れると一気に硬度を取り戻していくのがすぐにわかった。

「へぇ、元気なもんだ。これならパイズリしがいがあるってもんだ」

そう涼が口笛を吹くと同時に、私のペニスに凄まじい快感が襲ってくる。

「あぁっ……！？」

思わず声が出てしまう。それほどの快感だった。涼のおっぱいが私のモノを包み込んで、その柔らかさと温かさを伝えてくる。そしてそのまま上下に動かされるともうダメだった。

「うぁっ……！これっ……すご……！」

「だろ？アタシの自慢の胸だからな。イきまくって良いんだぜ」

涼が得意げに言う。確かにこれは凄い、こんな快楽は初めてだ。私はあっという間に絶頂寸前まで押し上げられてしまっていた。パイズリをする彼女も快感は得ているようで、その瞳がギラギラと燃えている。

「あぁっ……くぅ……」
「どうした凛、もうイッちまいそうなのか？」
「クッ！？」

涼がからかうように言う。しかし反論する余裕もないので私はただ耐えるだけだ。そしてついに限界を迎えてしまう。

「うぁぁっ！こんなのダメぇぇぇぇぇ！！！」

どぴゅうっ！ぶびゅるるるるっ！と勢いよく飛び出した精液が涼の顔や胸に降りかかる。しかしそれでも彼女は手を止めず、むしろさらに激しく胸を動かし始めた。

「あぁっちょっと…待って……！」

私の制止の声など聞こえていないのか、涼はさらに強く胸を押しつけてくる。その圧力に耐えきれず、私のペニスは次の射精の準備を始めてドクドクと脈打つ。